

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520340

研究課題名(和文)シェイクスピア演劇とイスラム世界

研究課題名(英文)Shakespeare and the World of Islam

研究代表者

勝山 貴之(Katsuyama, Takayuki)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：30204449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：16世紀の英国は、強大なカトリック勢力と対峙するなか、地中海における交易路の開拓に腐心していた。エリザベスに残された唯一の道は、北アフリカや東地中海のイスラム教国と通商条約を結ぶことであった。しかし、オスマン帝国をはじめとする異教国との同盟に対して、英国人たちは不安を抱かずにはおれなかった。彼らは、異教の文化によって、自国の文化が浸食されてしまうのではないかと恐れたのである。異教の「他者」と接触した英国人の精神的葛藤は、劇の中にどのような形で描かれたのか。東洋での異文化体験を綴った旅行記を手掛かりに、「他者」との遭遇を描いた劇の分析を試み、『シェイクスピアと異教国への旅』としてまとめた。

研究成果の概要(英文)：In the sixteenth century England had difficulty establishing Mediterranean trade routes, chiefly because of the menace to the English, in that region, of powerful Catholic countries. The only way open to Queen Elizabeth was to seek stronger relationships with the Islamic countries of Northern Africa and the Eastern Mediterranean. However, new alliances with the peoples of the Ottoman empire (and beyond) inspired fear inside England. The English worried lest their culture suffer from the influence of a world beyond Christendom. A question arises: How were conflicting attitudes toward this new "Other" dramatized by Shakespeare? After studying sixteenth-century and early-seventeenth century travelogues devoted to the Orient, I examined encounters with "the Other," as portrayed on the Elizabethan stage, and completed a book titled Beyond Christendom: Shakespeare and Travel Narratives of the East.

研究分野：英米文学・英語圏文学

キーワード：シェイクスピア イスラム 異教国 旅行記 アイデンティティ 自己成形 他者

1. 研究開始当初の背景

近年、多くの研究者が、シェイクスピアの描く地中海世界に、とりわけ劇作家の描きだすオスマン・トルコの表象に関心を寄せている。注目すべきは、ナビル・マター(Nabil Matar)やダニエル・ヴィトカス(Daniel Vitkus)、更にダヒル・ヤーヤ(Dahiru Yahya)の研究である。彼らの著書によって、イスラム教国とプロテスタント英国の関係が明らかにされつつある。地中海における交易を考えるなら、エリザベスがカトリック勢力を回避し、異教徒たちとの通商条約を重視したことも頷ける。キリスト教国でありながら、イスラム教国との友好関係を築いていかなくはならなかった英国の複雑な外交上の立場を解明し、異教徒と対峙した英国国民の内面の葛藤を探求することは重要であろう。しかしながら、日本国内ではイスラム教世界とシェイクスピアの関係を取り上げたものは極めて少ないため、是非とも研究されるべき分野であると考えた。

2. 研究の目的

従来のシェイクスピア研究は、地中海について考察を進める時、しばしば芝居の材源探しを念頭において進められてきた。しかし近年の研究動向は、外交・通商・宗教といった観点から、地中海の重要性を再考しようとする方向へと移行してきている。西洋と東洋の接点となった地中海世界に対する新たな研究の方向が、近代初期の演劇研究に与える影響は大きい。

本研究は、16・17世紀に、イスラム教国やヒンドゥー教国などを訪れたキリスト教ヨーロッパ人の旅の記録を繙くことによって、旅行記に描き出された時代の精神性とシェイクスピア演劇の相関関係を解明しようとするものである。同時に、舞台上に接した観客が、異教文化との接触を通して経験することとなる、英国人としてのアイデンティティの発見と見直し、すなわち彼らの自己形成の軌跡を辿ることを目標としている。

キリスト教ヨーロッパ圏を超えて、遠く離れたイスラムやヒンドゥーといった異教の国々との交易が盛んになりつつあった時代に、異国の風俗を書き記した旅行記は多くの人々の関心を集めた。当時、最大の娯楽であった演劇は、そうした異教国の風俗・習慣を、いち早く舞台上に描き出すことにより、劇場に詰めかけた観客の関心を惹こうとした。これらの芝居の中の異邦人たちは、時にその風俗・習慣を誇張され歪曲されて描かれることによって、英国人の失笑や嘲笑を誘うよう演出されたのである。

英国人は、自分たちとは大きく異なる文化や風習に驚き呆れ、優越感に浸りながらも、

同時に心の奥底でかすかな不安や動揺を覚えたに違いない。そこに描かれた「他者」に対する侮りや軽蔑を通して、自らの文化を正当化し、劇の終幕に敗北者として舞台を去る異教国人の姿に満足感を味わう英国人の態度に、彼ら自身の内に潜む不安感を感じ取ることができる。英国人は、劇の結末で経験する興奮と歓喜の陰で、自分たち自身の価値観を改めて問いかけ、自分たち自身のアイデンティティの再確認を迫られたであろう。

遙か彼方に暮らす異邦人である彼らと邂逅し、キリスト教世界とは決して相容れることのない価値観との接触を通して、英国人は自分たちを相対化し客観視する契機を得ることとなったはずである。演劇は、まさに英国人に「他者」との遭遇の場を提供し、彼らの抱く世界観を、そして彼ら自身の存在を問いかけるという、大きな役割を果たしたと言えるであろう。そうした英国人の自己成形の様子を、演劇の中に探求したい。

3. 研究の方法

必要な書籍の購入、またはインター・ライブラリー・サービスを利用して、国内の国立大学図書館・私立大学図書館から、初期近代イスラムに関する資料、およびイスラム世界とシェイクスピア演劇関連の資料を収集した。また資料収集の場を海外に広げ、ロンドン大学、ケンブリッジ大学、ハーヴァード大学等の図書館においての資料収集もおこなった。デジタル・アーカイヴ(EERO)の助けを借りて、近代初期の文献の収集にもつとめた。集めた資料をもとに、シェイクスピアの喜劇、悲劇、ローマ史劇および、同時代の劇作家による劇作品を分析・研究し、日本英文学会、日本シェイクスピア協会、関西シェイクスピア研究会等で研究発表をすることにより、この方面に関心を寄せる研究者たちと意見交換をした。また米国ハーヴァード大学および英国ケンブリッジ大学の研究者たちとも意見を交換した。研究発表後は、順次、学会誌へと投稿した。

4. 研究成果

(1)モロッコ研究 2008年から遂行してきた研究で、イスラム教国でありながら英国と外交・通商関係を築いていた北アフリカのモロッコを対象としたものである。16世紀後半、複雑に展開する英国とモロッコ両国の外交の様子を旅行記や外交書簡に辿りながら、従来はヴェニス舞台にすると考えられてきた劇作品『ヴェニスの商人』の読み直しを試みた。この研究は、2008年10月に日本シェイクスピア協会大会で発表の後、2009年3月に発行された『同志社大学英語英文学研究』

第 84 号に「地の果てからの来訪者と『ヴェニスの商人』」と題して掲載されたが、その後、大幅に加筆し、今回出版される『シェイクスピアと異教国への旅』の第 1 章とした。

(2)イスラム教徒ムアア人研究 - 2009 年から 2010 年にかけて行われた研究で、キリスト教への改宗者として名高いレオ・アフリカヌスの筆になるアフリカの地誌の成立と、この書を英訳したジョン・ポーリーの手法の分析を試みた。その上で、分析結果を劇作品『オセロ』解釈に応用し、作品の中のムアア人主人公の自己成形の有り様を探求した。研究内容は、2010 年 2 月の関西シェイクスピア研究会で発表の後、加筆修正したものを、同年 10 月に日本シェイクスピア協会大会におけるイスラム・セミナーで参加メンバーと議論した。その後「『オセロ』とイスラム世界 17 世紀初頭のキリスト教ヨーロッパが抱いた不安と葛藤」と題する論文として、『同志社大学英語英文学研究』第 86・87 合併号に発表した。更に、この論文に加筆し、今回の『シェイクスピアと異教国への旅』の第 4 章とした。

(3)エジプトおよびジブシー研究 - 2012 年から 2013 年にかけて行われた研究で、エリザベス朝においてエジプト人と混同されたジブシーの生態を探りながら、『アントニーとクレオパトラ』におけるジブシー女王クレオパトラの表象を解明し、そのイメージの逆展開についての分析を試みた。研究内容は、2013 年 10 月発行の『主流』第 75 号に、論文「『アントニーとクレオパトラ』とエジプト近代初期英国におけるエジプト表象と劇作家の手法」として掲載された。『シェイクスピアと異教国への旅』の第 5 章として収録した。

(4)イスラム教圏イリリア研究 2014 年の下半期におこなった研究で、オスマン・トルコ帝国属領イリリアを旅したニコラス・ニコライの旅行記に記された「宦官」への言及を端緒に、「宦官」的役柄を演ずるヴァイオラ/シザーリオの活躍と、劇の後半における「宦官」の恐怖の浄化について分析した。研究内容は、『シェイクスピアと異教国への旅』の第 3 章「イリリアの宦官 『十二夜』とオスマン・トルコ帝国」として収録した。章全体の内容を簡略化し、2016 年 5 月の日本英文学会で発表した。

(5)ヒンドゥー教インド・ビジャヤワダ帝国研究 2015 年上半期におこなった研究で、『真夏の夜の夢』における「インドの稚児」への言及を手がかりに、従来の批評では着目

されることのなかったインド南部のヒンドゥー教社会ビジャヤワダ帝国に光をあて、彼の地を訪れたヨーロッパ人の旅行記に記された女系社会の伝説を調査した。研究内容は、2016 年 3 月にエリザベス朝研究会で研究発表し、出席した研究者たちと意見交換をした。『シェイクスピアと異教国への旅』第 2 章「インドの稚児 『真夏の夜の夢』とヒンドゥー教インド」として収録。

(6)サファビー王朝ペルシャ研究 2014 年末から 2015 年 3 月にかけて行った研究で、16 世紀末に出版されたシャーリー兄弟のペルシャ旅行記をもとに、その活躍を描いた劇作品『英国三兄弟の旅』を分析しながら、シェイクスピア作品との比較を試みた。2015 年 10 月発行の『主流』第 77 号に「ペルシャ帝国と『英国三兄弟の旅』」と題する論文として掲載された。『シェイクスピアと異教国への旅』第 6 章として収録するにあたり、更に大幅な加筆を施した。

(7)科研での研究の総括であるこの書物『シェイクスピアと異教国への旅』全体を通して、異教の文化と遭遇することによる英国人の不安と恐怖が、劇の中にいかに投影され、それらを劇の展開の中でどのように回収・浄化していくかという劇作家の作劇手法を論じた。書物『シェイクスピアと異教国への旅』は、科研の公開促進費の支援により、2016 年 11 月に出版される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

勝山貴之 「ペルシャ帝国と『英国三兄弟の旅』」『主流』第 77 号 2015 1-26 査読有

勝山貴之 「キャムデンの地誌『ブリタニア』の出版とシェイクスピアの『リア王』土地、相続、権力をめぐる言説」『同志社大学英語英文学研究』第 90 号 2013 37-73. 査読有

勝山貴之 「『アントニーとクレオパトラ』とエジプト近代初期英国におけるエジプト表象と劇作家の手法」『主流』第 75 号 2013 49-79. 査読有

勝山貴之 「歴史劇と初期資本主義経済 Richard II における “property,” “credit,” “bankruptcy”」Shakespeare

News Vol.53 No.1 2013 21-30. 査読有

勝山貴之 「エリザベス崇拝と劇作家ジョン・リリー 少年劇団の再結成とリリーのリバイバル」『同志社大学英語英文学研究』第89号 2012 39-64. 査読有

勝山貴之 「女王陛下の少年劇団 劇団・劇場・宮廷上演」『主流』第74号 2012 1-19. 査読有

勝山貴之 研究ノート「17世紀初頭のイングランドにおける啓蒙書と民衆の政治参加 ウィリアム・ウィリマット, バーナビー・バーンズ, そしてシェイクスピア」『主流』第73号 2011 57-72. 査読有

勝山貴之 書評 “David Armitage, Conal Condren, and Andrew Fitzmaurice, eds. *Shakespeare and Early Modern Political Thought.*” *Shakespeare Studies.* Vol.48. 2011 36-38. 査読有

勝山貴之 「『オセロ』とイスラム世界 17世紀初頭のキリスト教ヨーロッパ世界が抱いた不安と葛藤」『同志社大学英語英文学研究』第86・87合併号 2011 1-26. 査読有

勝山貴之 「プロスペローの“human care” 征服者ではなく庇護者たろうとするイングランド人の不安と葛藤」『同志社大学英語英文学研究』第85号 2010 1-28. 査読有

勝山貴之 「地の果てからの来訪者と『ヴェニスの商人』」『同志社大学英語英文学研究』第84号 2010 23-55. 査読有

勝山貴之 「カトリック穏健派とプロテスタント遵法者 アンソニー・マンディと『サー・トマス・モア』」『主流』第71号 2010 1-20. 査読有

〔学会発表〕(計8件)

勝山貴之 「イリリアの宦官 『十二夜』とオスマン帝国」第88回日本英文学会(2016.5.29 於:京都大学)

勝山貴之 「『真夏の夜の夢』とヒンドゥー教ビジャヤワダ帝国」エリザベス朝研究会(2016.3.26 於:慶應大学)

勝山貴之 「『アントニーとクレオパトラ』とエジプト」エリザベス朝研究会(2013.3.9 於:慶應大学)

勝山貴之 「女王陛下の少年劇団 劇団の活動と劇作家ジョン・リリー」関西シェイクスピア研究会(2012.6.24 於:大谷大学)

勝山貴之 「William Camden の地誌 *Britannia* と *King Lear*」エリザベス朝研究会(2012.3.17 於:慶應大学)

勝山貴之 セミナー「シェイクスピアとイスラム世界」(セミナー・リーダー)第50回日本シェイクスピア協会大会 2010.10.17 於:福岡女学院大学)

勝山貴之 「*Othello* とイスラム世界」関西シェイクスピア研究会2月例会(2010.2.21 於:同志社大学)

勝山貴之 「地の果てからの来訪者と『ヴェニスの商人』」第47回日本シェイクスピア協会大会(2008.10.11 於:岩手県立大学)

〔図書〕(計2件)

勝山貴之 『シェイクスピアと異教国への旅』(英宝社)(科研公開促進費 2016.11 出版予定)

勝山貴之 『英国地図製作とシェイクスピア演劇』(英宝社)(福原記念英米文学賞受賞) 2014.11

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者

勝山貴之 (KATSUYAMA, Takayuki)
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：30204449

(2)研究分担者 なし
()

研究者番号：

(3)連携研究者 なし
()

研究者番号：